

# 震災の教訓教材に生かす

舞子高校環境防災科では、3年生が卒業研究で自らの震災体験をつつり、「語り継ぐ」という冊子にまとめる。書くうちに記憶がよみがえり、震災の教訓を伝えることの大切さに改めて気づく生徒も多い。

いずれも神戸で被災した1期生の上本真巨さん(20)、前田緑さん(20)、島本一志さん(20)ももたらした。それぞれ神戸学院大に進学。同大で06

年度から始まったプログラム「防災・社会貢献ユニット」に参加し、防災教育の教材づくりに取り組んでいる。

昨年12月7日、3人は仲間と一緒に兵庫県姫路市の市立旭陽小学校を訪ね、5年生と6年生の授業で先生役をした。

山さんは国語の担当。震災の語り部の男性の話を自分でもまとめた「子どもポラリティア」という文を印刷して配

った。小学校の避難所で子どもたちがパンを配ったり、トイレ掃除をしたりしていた内容。読解力や漢字能力をはかる設問がついていて、防災と国語を同時に学べるようになっている。

前田さんと島本さんは体育。子どもたちに、災害時に視覚障害者がどんな状況で避難するかを疑似体験してもらった。児童は2人1組になり、1人がアイマスクを着

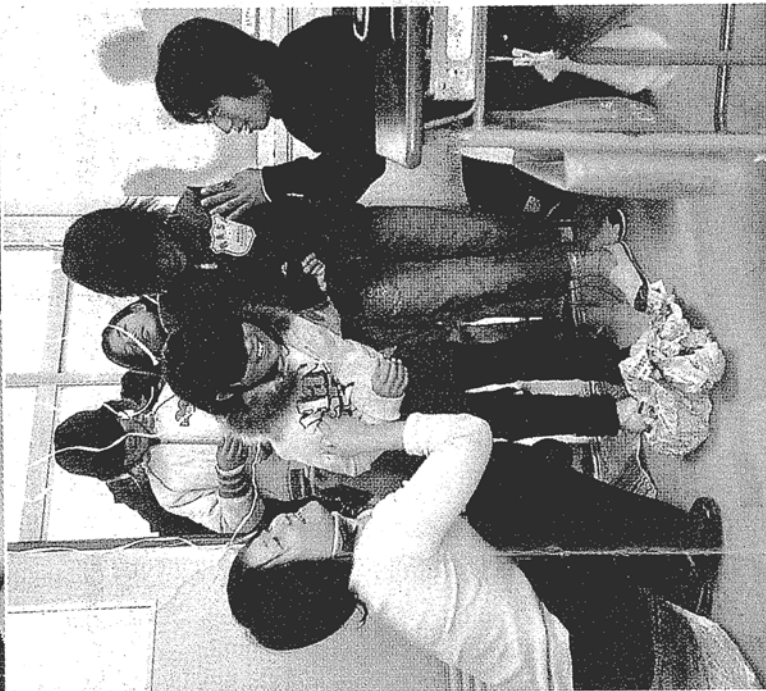
け、もう1人が手を引いて、机や机の障害物を置いた教室内を移動した。

「段差に注意して」「目が見えない人に周囲の状況を説明してあげてね」。子どもたちに丁寧にアドバイスする。

前田さんは言う。「震災をきっかけにできた環境防災科の卒業生として、これからも防災の大切さを発信し、一人でも多くの命を守りたい」

傷ついた人を支えられる人になりたい

## 神戸学院大の3人



①震災時の「子どもポラリティア」を題材にした教材で国語の授業をする上本真巨さん ②防災の体験学習授業をする前田緑さん(左)と島本一志さん(右)。障害物を準備した教室を災害現場に見立て、アイマスクをした視覚障害者役の児童を誘導する。いずれも兵庫県姫路市の市立旭陽小学校で